



令和4年度

教育学部

社会人選抜

小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 2 この問題冊子は、表紙を含めて6ページ、解答用紙は4枚、下書き用紙は1枚である。
試験開始の合図があってから確認すること。
なお、試験問題に文字などの印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどがあった場合は、手をあげて監督者に知らせること。
- 3 試験開始後に、解答用紙の指定欄に受験番号を記入すること。
氏名を書いてはいけない。
- 4 解答は、指定された解答用紙に記入すること。
指定された解答用紙以外に記入した解答は、評価（採点）の対象としない。
- 5 配布された問題冊子および下書き用紙は、試験終了後に持ち帰ること。

実施年月日
3.11.24
富山大学

問題訂正



○11月24日(水)

小論文 9時30分試験開始 教育学部共同教員養成課程

1 問題文の問1

(正) 学力が育まれているかを

(誤) 学力が育くまれているかを

2 課題文1枚目の上から7行目, 課題文2枚目の上から11行目,
課題文3枚目の上から7行目

(正) 育んでいない

(誤) 育くんでいない

3 課題文2枚目の上から7行目と14行目

(正) 育んでいない

(誤) はぐくんでいない

4 課題文3枚目の上から12行目と19行目の空白を詰める。

次ページ以降の課題文を読み，以下の問いに答えなさい。

- 問 1 日本の学校教育ではどのような学力が育くまれているかを 400 字以内で説明しなさい。
- 問 2 自分が教員になったことを想定した上で，どのような授業を展開すれば創造力を育てられると思うか，あなたの考えを 1,200 字以内で述べなさい。

課題文

「新しい学力観」「ゆとり教育」「アクティブラーニング」

ここまで、ティムズ^{註1}の結果を見てきました。ティムズが測っているのは「学校で習った内容をきちんと覚えていて使えるか」という20世紀的な学力でした。ですから、ティムズで良い成績をあげているということは、日本の子どもたちは、学校で習った知識をきちんと身につけているということです。

では、日本の子どもたちは、身につけた知識を創造的に使うことができるのでしょうか？「日本の教育は創造性を育んでいない」としばしば言われます。実際、この仮定のもとに、これまでの教育改革が行われてきたように思います。

この40年ほどの間に行われてきた教育改革のキーワードをいくつか挙げると、「新しい学力観」「ゆとり教育」「アクティブラーニング」などがあります。みなさんはこれらの言葉をどのくらい覚えているのでしょうか？

「アクティブラーニング」は今の教育政策の中心ですから、多くの方が聞いたことがあるかと思います。もしかしたら、文部科学省が「アクティブラーニング」とほぼ同じ意味で使っている「主体的・対話的で深い学び」という言葉のほうがなじみがあるかもしれません。「アクティブラーニング」という言葉は様々な意味で使われていますが、その最大公約数的な特徴は、「子どもが先生の説明を受動的に聞くのではなく、子ども同士がグループワークなどを通じて主体的に学びを行う」という点です。

そうした細かい内容はともかく、「アクティブラーニング」という言葉自体は、多くの方が聞いたことがあるかと思います。一方で「新しい学力観」と「ゆとり教育」はどうでしょうか？「ゆとり教育」は、30代以上の方々は覚えがあるかと思います。では「新しい学力観」は？これは、教育について専門的に学んだ方々を除くと、覚えている方はあまりいないのではないかと思います。

実は、「新しい学力観」「ゆとり教育」「アクティブラーニング」の3つは一連りのものです。

最初に出てきたのが「新しい学力観」です。この考え方は1990年代に学校現場に導入されました。導入の背景には、「旧来の学力観は基本的には知識を重視していたが、それでは21世紀の国際化・情報化などの新しい変化に対応できない」という認識がありました。そこで、21世紀を生きるのに必要な学力観として、考える力・創造性・応用力などを重視した「新しい学力観」が導入されたのです。

この「新しい学力観」は、2000年代に本格化する「ゆとり教育」の思想的な礎(いしづえ)となりました。「ゆとり教育」によって、学習内容と授業時間が削減されたことを覚えていらっしゃる方は多いかと思いますが、ゆとり教育を単純に「学習内容と授業時間の削減」とだけ捉えるのはいささか狭い理解です。

「ゆとり教育」は、教育についての思想そのものを変えようとしたのです。まず、教育内容を厳選することで、知識重視の教育からの脱却を図り、それと同時に、子どもたちの考える力・創造性・応用力などを養うことを目指しました。そのための工夫の1つが、「総合的な学習」の導入でした。これは、子どもたちが自ら課題を見つけて、従来の科目にとらわれることなく、横断的・総合的に学習をするための時間でした。

しかしながら、2000年代に日本の学力が低下したという世論を受けて方向転換を迫られ、2010年代からは授業時間を再び増やし、現在の授業時間数は「ゆとり教育」以前の水準に戻りました。それでも「新しい学力観」という考え方は、ほぼそのまま残され、さらに、新たに「アクティブラーニング」が導入されました。

「アクティブラーニング」では、子どもたちはただ授業を聴くのではなく、何らかの活動

をすることによって学びます。つまり、その背景にある思想はこうです。「子どもたちの学びは、ただ知識を獲得するところに意義があるわけではない。むしろ、知識を応用し、新たな創造をできるようにすることこそが大事だ」。この思想は、「ゆとり教育」とほとんど変わりません。

以上のように見てくると、「新しい学力観」「ゆとり教育」「アクティブラーニング」はともに同じ思想を基にしている、ある1つの前提に立っていることがわかります。それは「これまでの日本の学校教育は創造性をはぐくんでいない」という前提です。そう信じているからこそ、「新しい学力観」が提案され、それをもとに「ゆとり教育」や「アクティブラーニング」が導入されたわけです。

「創造性」を測るピザ^{注2}

「日本の学校教育が創造性を育んでいない」という前提は、教育改革を担う文部科学省の官僚だけでなく、一般市民にも広く共有されているように感じます。というのも、著者の1人(ラブリー)は京都大学で講義を持っていますが、レポートに「日本の教育は創造性をはぐくんでいない」と書いてくる学生が毎年たくさんいるからです。

これには少し驚きます。というのも、私はふだん講義で「日本の学校教育はけっこういい」という話をしているからです。学生たちは、決して私の話を聴いていないわけではなく、その話があまりに一般に言われていることと異なるので、受け入れがたいのだろうと想像しています。

では、日本の子どもたちは本当に創造的でないのでしょうか？この問いに答えるのは、実に難しいです。というのも、そもそも「創造性」というものが何なのか、簡単には定義できないからです。仮に定義できたとしても、それをテストなどで測ることができるのか、という問題もあります。

ただ、創造性をなんとか定義して計測しようという試みも行われています。OECDの行っているピザがその1つです。ピザでは創造性を、「習得した知識を新しい場面において創造的に使う能力」と限定的に定義します。こういう風に限定的に定義された創造性なら、計測をして国ごとに比較することも、一応はできるようになります。

ピザは、知識の創造的利用を計測しようとしている点で、知識の習得を計測しているティムズと異なります。もう1点、ピザがティムズと異なるのは、数学・理科に加えて、読解力も対象としているところです。ただ、本書を読むうえで一番大事な点は、ピザの測っている創造性というのは、「新しい学力観」が重視するものとほぼ重なっていることです。

それでは、ピザのデータを使って、日本の子どもたちの創造性を見てみましょう。以下、2018年のピザの結果を見ていきますが、結果を見る前に予想してみてください。2018年のピザには、79の国と地域が参加しました。日本は何位でしょうか？アメリカはどうか？フィンランドはいかがでしょうか？

フィンランドは、2003年のピザにおいて、3科目中2科目で世界一だった国です。それ以来、日本を含む世界各国が、フィンランドに教育を学ぼうとしています。日本でも、フィンランドの教育を紹介する本が何冊も出版されています。

実は創造性が高い東アジア諸国

では、ランキングを見てみましょう。図1に上位20位までを示してあります。日本は数学で6位でした。アメリカは20位以内には入れず37位、フィンランドは16位でした。理科は日本が5位、アメリカは18位、フィンランドは6位でした。読解は、日本が15位、アメリカが13位、フィンランドが7位でした。どうですか？予想は当たりましたか？

数学と理科については、日本は健闘しています。日本とともに上位にいるシンガポール、

香港、マカオなどが面積も人口も限られた都市であることを考えれば、日本の成績はまずもって申し分ないと感じます。全科目で1位の中国はすごいですね。ここでの「中国」は中国全土ではなく、北京、上海、江蘇（こうそ）省、浙江（せつこう）省を指しています。これらの地域は、歴史的に最も教育が盛んな場所であるとはいえ、総人口では日本の人口を上回っています。それでも1位になるというのは簡単なことではありません。

ピザのランキングをざっと見て気づくのは、上位のほとんどを東アジアの国が占めていることです。一般に、日本を含む東アジア諸国の教育は創造性を育くんでいないと言われていいます。しかし実際には、東アジアの国々はティムズだけでなく、ピザでも良い成績を収めています。つまり、東アジア諸国は、子どもたちに基礎的な知識（ティムズによって計測される能力）だけではなく、その知識を創造的に使う能力（ピザによって計測される能力）を身につけさせることにも成功している、ということの意味します。

さらに言うと、ピザの数学・理科で上位に来ている国は、概ねティムズでも上位に来ています。ヨーロッパ諸国の中では、ピザで良い成績をあげているフィンランドやエストニアがティムズのランキングに見当たりませんが、これは両国がティムズに参加していないからです。ピザ上位の国とティムズ上位の国が似ているということは、知識を創造的に使うためには、まず知識を習得しなければならない、ということの意味しているかもしれません。

日本の近年の教育改革は、「知識から創造性へ」という方向性を強調します。しかし、ピザとティムズのデータを比べてみると、知識習得がおろそかになると、知識も創造性もない子どもたちが生み出されるかもしれない、という危険があるように感じられます。そもそも知識と創造性を対立的なものとして捉える考え方が、現実には即していないかもしれないわけです。

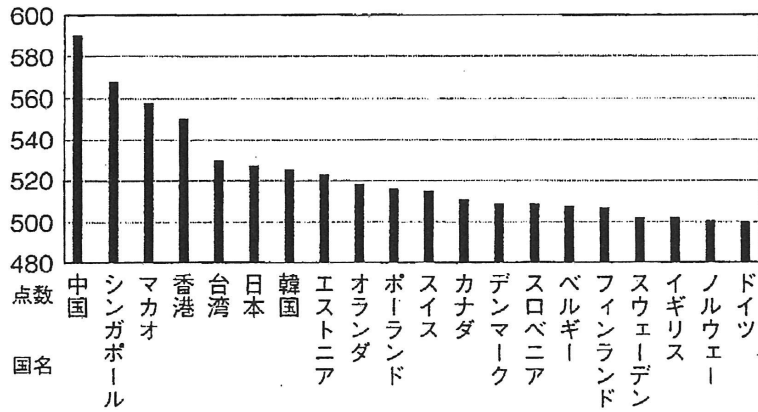
注1 ティムズ 国際教育到達度評価学会（IEA）が4年ごとに実施する学力テストで、算数・数学と理科の到達度を測定するもの。

注2 ピザ 経済協力開発機構（OECD）が3年ごとに実施する学力テストで、読解力・数的リテラシー（数字をもとに情報を読み解く力）・科学的リテラシー（科学の概念的理解）を測定する。これまでに身に付けてきた知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを測る。

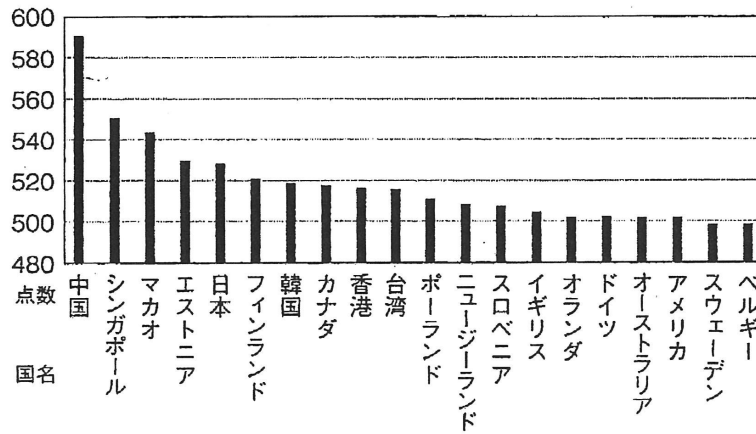
出典：小松光／ジェルミー・ラプリー（著）

『日本の教育はダメじゃないー国際比較データで問いなおす』 ちくま新書 2021年
より一部改変

(a) 数学



(b) 理科



(c) 読解

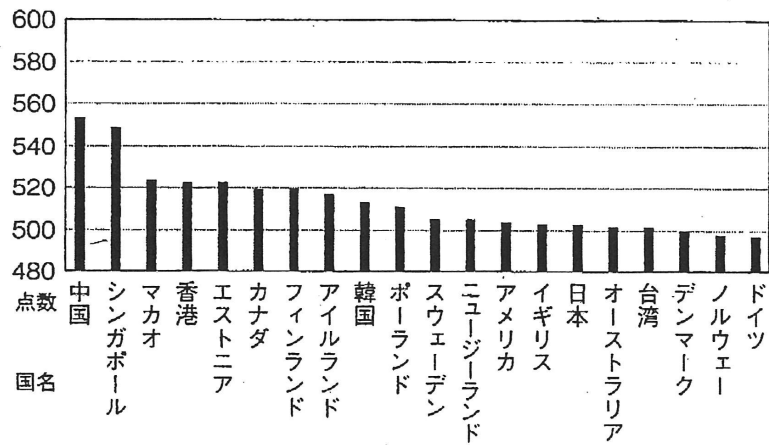


図1 21世紀型学力(上位20位)

出所：ピザ 2018年。中国は北京・上海・江蘇省・浙江省

問 2

受験番号 ()



下書き用紙

見本